

琉球大学学術リポジトリ

沖縄染織文化の研究に関するデータベースの構築

メタデータ	言語: 出版者: 片岡淳 公開日: 2009-03-03 キーワード (Ja): 染織品, デジタル顕微鏡, 芭蕉, 大袖衣, 繊維, 琉球の染織品 キーワード (En): Ryukyu, Textile, Formal Costume, Banana Fiver, Weaving 作成者: 片岡, 淳, Kataoka, Jun メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/9028

巡回技術指導テキスト

沖縄織物の特徴
- 沖縄各地の織物の違い -

主催 : 沖縄県工芸指導所

指導場所 : 与那国町伝統織物協同組合

日時 : 平成12年11月30日(木)
9:00 - 17:00

講師 : 片岡 淳
琉球大学教育学部 助教授

平成12年11月30日(木)

沖縄織物の特徴

-沖縄各地の織物の違い--

文責：片岡 淳

沖縄の花織の種類について

花織の説明や定義については、那覇市伝統織物事業共同組合が昭和61年に出版した「首里織の歴史と技法」に基するところが大きいです。そこで以下、抜粋しました。なお、箇条書きにしたところがあることをお許しくたさい。

(3) 首里花織

① 首里花織の分類 「花織」とは、美しく変化に富むこの織物にいかにもふさわしい名称である。この花織の「花」という意味についても

- 花のように美しい織物
- 花のような色糸をさすもの
- 花のような紋様をさすもの

等といろいろ言われている。又、首里の方言では、物のはしっこの事を「ハナ」といい、糸の端々が平織の布目に一部経浮、緯浮と浮き織られて紋様を作るので「端織」、すなわち「花織」となったともいわれている。

(1) 両面浮花織（織り込み花織）

いつの頃からか、首里花織というこの両面浮花織のことをさすようになっていく。他の三種の花織が、読谷、与那国等の地方でも織られたのに対し、この両面浮花織は、もっぱら士族専用として首里を中心に織られた。

紋様は、表は緯糸が浮き、裏は経糸が浮き、紋部浮糸以外の糸は地に織り込まれ遊び糸がないため、両面使用できる。本来は緯浮面が表である。・・・種類 無地花織綿衣 絹・絹と木綿の交織

冬の礼服

黄金色 王妃・王女・世子妃

黄色 按司婦人

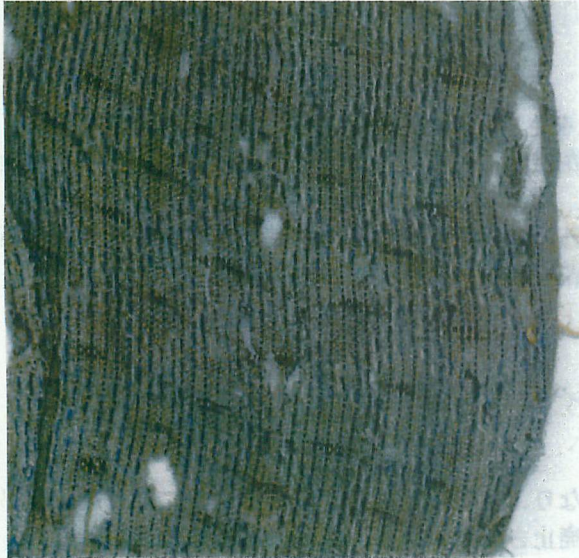
水色 親方婦人

薄緑色 親雲上婦人

・・・明治以後尚家や士族が民間へ出機を依頼するようになり、一般にも技術が広がるようになった。与那国の両面花織もこの頃から始まったものである。 服制が廃止された頃から、庶民の間でも花織が着られるようになるが、上流士族の礼服用だった無地物は、まだ庶民には敬遠され、無彩色風の柄の細かいヤシラミ花織がいち早く受け入れられる。なかでも紺、白のヤシラミは喪服として一枚はそろえる事がたしなみとされ、首里柄、那覇柄とあった。ヤシラミはほとんど綿織で藍染であった。・・・



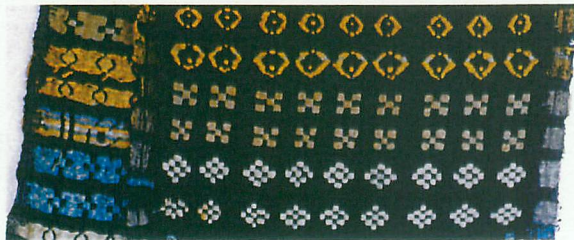
奄美大島の経縞緯緋に花織 表面には、紋部に緯糸が浮いている。



同布の裏面には、経糸が浮いている。

(2) 緯浮花織

緯浮花織は、地綜統に加えて、紋綜統を使用するのは、両面浮花織と同様である。織り布は、両面浮花織は、紋部以外の糸は、地糸に織り込まれたのに対し、緯浮花織は、紋部意外の緯糸は裏に長くとび、あそび部分が多いのが特徴である。この緯浮花織は首里及び読谷山地方でも織られた。・・・



与論の十五夜踊りに使われた花織 (筆者撮影)

(3) 経浮花織

経浮花織は、地綜統に加えて、紋綜統を使用するのは、両面浮花織と同様である。織り方は、両面浮花織は紋部以外の糸は、地糸に織り込まれたのに対し、経浮花織は、紋部以外の経糸は裏に長くとび、あそび部分が多いのが特徴である。

この経浮花織は、緯浮花織同様に首里および読谷山地方で織られた。普通、緋や縞と組み合わせられ、田舎綿衣、ドゥーブク、踊り衣裳、手巾等が織られた。



奄美大島の「ハビィラ衣」三角形に接ぎ合わせた
袷胴衣には紅型と経浮花織の各布が使われている。
(筆者撮影)

(4) 手花織

四種の技法のうち、ただ一つ紋綜統を使用しない技法である。模様を入れたい部分を、手又は竹棒などですくい、模様糸を織り込み、織り終わった模様糸は、裏で裁ち切られる。最も初歩的な技法で古くから類似する方法は、世界のあちらこちらに分布するが、見事な意匠設計と緻密な作業により、数々の傑作を残したのは、沖縄において例がないといえよう。

主に巾白、手巾、踊り衣裳等が作られたが、代表的なのは手巾である。・・・この手巾は、地方においては、村娘が恋する男性に愛の告白とし贈った習慣があり、いわゆる「想いの手巾」として知られている。

身分制度や作法の厳しい首里においては、そのような習慣はなく、役人の姉妹が旅立つ兄弟に贈った「ウナイ手巾」というのがあった。当時の旅は、舟による航海が多く、王府の命を受けて、離島、本土、遠くは中国迄赴き、その危険は想像を絶するものであった。安全を祈願して真心をこめて織られたウナイ手巾は、御守りとして海を渡り、又、一方では歴代法案にも記されたように、王府の贈答品としても、貴重な織物だったといえる。地方の想いの手巾が木綿だったのに対し、首里のウナイ手巾は、木綿を始め、絹、紬、上質の芭蕉で織られた。

以上が、首里を中心とした「花織」の解説です。
上記以外のものとして、与那国の「板花織」(シダリ)があげられます。



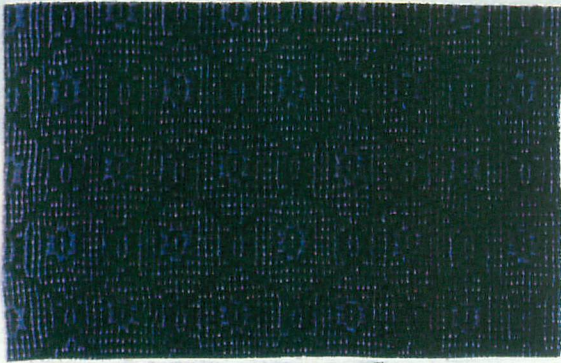
与那国町伝統織物共同組合所蔵衣装（筆者撮影）

「与那国織」については、平成3年に発刊された
沖縄県立博物館学芸員の与那嶺一子氏の「与那国織の歴史」を熟読されるのがよいでしょう。また「与那国織の現状」については沖縄県文化振興課の小橋川順一氏の報告を読んでいただきたいと思います。
また申し上げる迄もなく、みなさま与那国島在住者がもっともよく知っていることでしょう。しかし、記憶はどんどん風化してしまう傾向が強いので、どうぞ「自分史」を書くつもりで自分が生きてきたことを、花織をはじめとして、どんな小さな事でも、なんでも記録しておくといよいのではないのでしょうか。

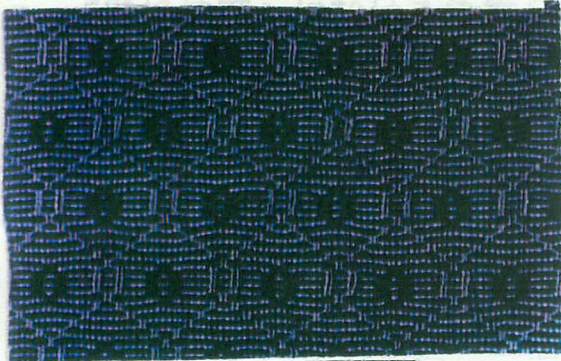


中国貴州省のトン族の織物 織り上げた布をさらに濃い藍染にしてから服を作るという
資料提供 鳥丸貞恵氏（福岡県工業技術センター）

経糸は白木綿糸双糸に、地組織を構成しながら、緯浮紋織糸は、濃い藍染めの木綿単糸S撚りと白木綿単糸を地糸として交互に織っています。



ヤシラミ花織緯浮織 絹 (表)

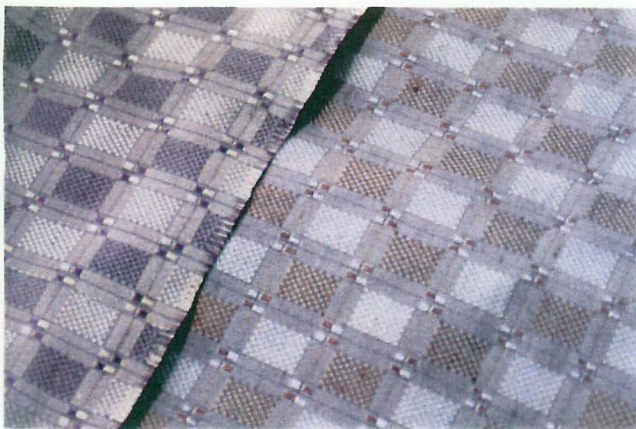


ヤシラミ花織緯浮織 絹 (裏)

南風原花織 上記2点の資料は平成10年1月に行われた伝統工芸製品の指定の申請提出資料より抜粋。
沖縄県伝統産業振興審議会織物部会部外専門家として参加したときの資料である。



南風原花織 「クワンクワン」花織 (筆者撮影)



南風原花織 総ヤシラミ花織 絹（筆者撮影）

読谷山花織については、組織的には首里花織（2）緯浮花織と（4）手花織と重複し、また説明がされているので、その項を参照して下さい。

知花花織 といい、平成12年4月より、沖縄市知花地区で作業所を設けて復元作業と製品づくりがはじまりました。沖縄県立芸術大学を卒業し、琉球大学教育学研究科(大学院)を修了した幸喜新氏を中心として研修生8名が復興に取り組んでいます。

おわりに

本論は、沖縄の織物についての説明でありながら、かつての琉球王国文化圏の奄美大島の資料も掲載しました。このことで、花織の多様性と今後のデザインの展開にもつながることと確信して見ていただきました。というのも、沖縄県工芸指導所の協力により、沖縄の花織についての現物見本裂資料を今回は、まじかに見ることができるため、重複してそれらの資料を印刷するよりも、その技術や文化の広がりを分かっていただくことを目的に、与那国島の資料以外は、沖縄県外、海外の資料を提示した。